

海のない村と、雪が降らない島との楽しい交流

【笠利町 B & G 海洋センター・鹿児島県（奄美大島）】

群馬県で土木設計の仕事をしていた霜触哲也さん。学生時代に競泳の選手だったこともあって海に強い憧れがあり、5年前に奄美大島へ家族ぐるみで移住し、水泳指導の職員として地元の笠利町 B & G 海洋センターで働くことになりました。

「こんな美しい海を群馬県の子供たちにも見せてあげたいし、雪の降らない島の子供たちに群馬県でスキーをさせてあげたい」

そんな話を役場の職員にしたところ、町の企画課が賛同。3年前、町制 40 周年交流事業として、海のない群馬県新治村と雪の降らない笠利町の子供たちの交流が始まりました。

「群馬県に住む人が海水浴に行くというのは、一大イベントなんです。一番近い新潟県の海でもクルマで何時間も走らなければなりません。それでも、奄美大島のような南海の美しさは体験できないのです。たまたま言ったアイデアが本当に実現してしまい、驚くとともに町の方々には大変感謝しました」

3年前、初めて奄美大島を訪れた群馬県新治村の子供たちは大感激し、ホームステイをしながらサンゴの海で思い切りマリンスポーツをエンジョイ。冬には笠利町の子供たちが新治村を訪れ、初めてのスキーに歓声をあげました。

大きな成果が得られたことを受け、この交流事業は毎年行われる恒例事業に発展。今年の夏も新治村から 16 名の小学生が島を訪れました。

「今年は、単に海で遊ぶだけでなく何か研修の要素も採り入れようと、本格的なシュノーケリングを試み、海に生きる生物の生態を学んでもらうようにしました」

シュノーケリングのインストラクターは、霜触さんと同じように島に I ターンしてダイビングの仕事に携わっている赤塚賢二さん。長年、水族館に勤務していたことから海の生き物に詳しく、もってこいの人材でした。

「やはり、楽しむだけでなく何かを学んでもらいたいですよね。子供たちは、図鑑でしか見たことがない魚やサンゴを自らの目で観察しながら、驚きの声をあげていました。こうした好奇心を養うことが大切だと思います」

今回は、B & G財団が行っているB & Gクリーンフェスティバルにも賛同。参加した子供たちは、みんなで海岸を清掃しながら環境の大切さを学びました。

「この交流会で友だちになった子供たちは文通をしたり、地元の特産品を送り合ったりして友情を深めています」

霜触さんが、ふと語った夢。いま、それが実を結び、これからも大きく育っていかうとしています。



今年も新治村から 16 名の子供たちが島を訪れました



子供たちは南の海を大いに満喫



本格的なシュノーケリングにも挑戦しました



B & Gクリーンフェスティバルで浜辺の清掃にも力を入れました